The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	半側空間無視患者における触覚性課題の検討
Author(s)	池尻, 義隆
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37953
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【37】

氏　　名	池　尻　義　隆（いけじり よしたか）
博士の専攻分野の名称	博　士（医学）
学位記番号	第　10175　号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学研究科　内科系専攻
学位論文名	**半側空間無視患者における触覚性課題の検討**
論文審査委員	(主査) 教　授　白石　純三 (副査) 教　授　西村　　健　　教　授　早川　　徹

論文内容の要旨

（目　　的）

半側空間無視の発現機序については，さまざまな仮説が提唱されているが，未だ一致した見解はない。また，これまでにも多くの臨床検査が考案され行なわれてきたが，そのほとんどは視覚を介した検査であり，他の感覚様式についての検査や研究は比較的乏しい。わずかに，無視に及ぼす視覚の効果や役割をみるために触覚性課題を用いた研究も行なわれているが，触覚性無視が視覚性無視と解離して生じるか否かについては一定の見解には達しておらず，その理由についても明らかにされていない。そこで，本研究では，情報入力の際の感覚様式の違いが，無視発現に影響を及ぼすかどうかを検討し，その成績の異同から，無視の発現機序を明らかにしようとした。さらに，両感覚様式による相違を明らかにするために，視覚と触覚で同一課題を施行し，直接的な比較をした。また，それぞれの感覚様式内でも要求される機構が異なると考えられる2種類の課題を併用することによって，感覚様式の差異だけでなく課題要求性の側面からも考察を加えた。

（方法ならびに成績）

右利きの健常者14名（平均年齢64.6歳）および一側大脳半球脳血管障害患者28名（右半球損傷27名，左半球損傷1名：平均年齢62.1歳）に，図形の模写，視覚性および触覚性線分二等分テスト，視覚性および触覚性探索テストを行った。図形模写において半側空間無視を呈する患者14名を無視（＋）群とし，呈さない患者14名を無視（－）群として，上記テストの結果を群間で比較検討した。なお，他に直線抹消テスト，図形抹消テストも行い，各テスト間の相関を検討した。検査施行時間は，発症後1.0 ～23.5カ月（平均6.5カ月）であった。

(1) 無視（＋）群は，視覚性線分二等分テスト，視覚性および触覚性探索テストで左半側空間無視を呈したが，触覚性線分二等分テストでは左半側空間無視を呈さなかった。無視（－）群は，健常群と同様にいずれのテストでも無視を生じなかった。すなわち，線分二等分テストでは触覚性無視は，（図形模写における）視覚無視と解離し，探索テストでは両者はほぼ一致して発現した。

(2) 触覚性線分二等分テストは他のいずれのテストとも相関はなかった。

(3) 患者ごとに，視覚性と触覚性の線分二等分テストおよび探索テストのいずれのテストで無視があったかを検討した結果，無視（＋）群は5型，すなわち視覚性課題でのみ無視を生じ触覚性課題では生じなかった型，視覚性課題と触覚性探索テストで無視がみられた型，すべてのテストで無視がみられた型，視覚性線分二等分テストのみで無視を示した型，視覚性と触覚性の探索テストのみで無視を呈した型に分類された。

(4) 病変部位については，無視（＋）群のうち12名は，縁上回，角回領域あるいはその皮質下白質を含む中大脳動脈領域の病変であった。他の2名は視床，内包，基底核病変であった。

（総　　括）

過去に触覚性課題として半側空間無視の研究に用いられた線分二等分と触覚性探索課題は，課題要求性が異なるものであること，半側空間無視は同一感覚様式内でも課題依存性があり，他方，感覚様式が異なっても共通の機構が関与することがあることが示唆された。

視覚性と触覚性の線分二等分および探索課題の成績パターンを分析することにより，半側空間無視患者を5型に分類することができた。さらにそのうち3型については，視覚による情報入力段階の障害，空間表象の形成，操作，あるいは利用の段階での障害，行為運動面での障害がそれぞれの無視の主要因であろうと推定することができた。また，他の2型の成績から，線分の長さの視覚的評価と平面の広い範囲に及ぶ視覚性探索機能とは異なる機構であると考えられた。

半側空間無視の責任病巣としては，縁上回，角回領域およびその皮質下白質を含む病変が重要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

半側空間無視の発現機序については，さまざまな仮説が提唱されているが，未だ一致した見解はない。本論文は，情報入力の際の感覚様式の違いが無視発現に影響を及ぼすか否かを検討したものであり，視覚および触覚という異なる感覚様式においても，無視発現には共通の機構が関与することがあることを明らかにした。さらに，感覚様式の差異だけでなく課題要求性の側面からも検討を加え，視覚のみならず触覚においても同一感覚様式内で課題依存性があることをはじめて示した。また，本研究で用いた視覚性および触覚性課題は，従来の半側空間無視患者をさらに細かく分類し，それぞれに異なった無視発現の要因を推定することを可能にした。これらの知見は，半側空間無視の発現機序を考える上で今後考慮されるべきものであり，また，本検査課題は臨床面で貢献するところが大きいと考えられる。

以上より，本論文は学位に値すると考える。